

神は純粋な心を愛する

グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダ

抜粋27

かつて、一人の若者がある女性に熱狂的な恋をしましたが、彼女は彼の好意に応えることがありませんでした。彼はひどいありさまで、その他のことは何も考えることができませんでした。彼は何に対しても喜びを見いだせず、気も狂わんばかりでした。ついに、友人の一人が町の郊外に住んでいる魔術師のことを話しました。その若者はすぐさまそこへ行って、魔術師に助けを求めました。

魔術師の目は暗く、異様な光で輝いていました。魔術師は言いました。「もし本当に助けてほしいなら、厳密に私の指示に従わなければならない」

「従うとも」。若者は叫びました。「何でもする。ただこの苦しい思いを何とかしたいんだ」

魔術師は言いました。「それなら、これから 40 日間、たとえ危機に陥ったとしても一言も祈りの言葉を口にしてはならない。また、いかなる方法でも神に従ってはならない。地上の誰のためにも善い行いをしてはならない。何よりも、神の名を口にしたり、いかなる形の善意も口に出してはならない。もし慎重にこれらの指示に従うなら、お前の目的を達成するために魔術を施すことができるだろう」

若者は本当にこの盲目的な片思いの病を克服したいと思っていました。ですから、彼は魔術師に言われた通りすべてを行いました。40 日たって、彼は魔術師の住んでいる暗い怪しげな小屋に戻りました。そしてまじないのために大金を——有り金すべてを——はたきました。しかし、効果は表れませんでした。

「お前は私の指示に従わなかったな」。魔術師は不機嫌に言いました。「この 40 日の間に、お前は何か善いことをしたに違いない」

「私は何もしていない」。若者は抗議しました。「誓います。40 日間ずっと、神のことを考えずに過ごしました。誰にも善いことをしていません。一言だって親切な言葉を掛けていないし、どんな神聖な行為もしていません。善意に近づくものからはすべて逃げていました。誓います」

「息子よ、考えてごらん。お前は何かしたはずだ。ほんのささいなことを。そうでなければ、このまじないは効いたはずだ」

若者は首を横に振りました。彼はこの 40 日間を振り返りましたが、まじないを破るようなことは何も思い付きませんでした…あれを除いては。突然彼は言いました。「もしかして。ある日、仕事に行こうと道を歩いていて、石につまずきました。その時こう考えました。『他の人がつまずいて転ばないように、これをどかした方がいい』」

「ああ、それが善い行いだ」と、魔術師は言いました。そして彼の声は厳かなものになりました。「神を侮ってはいけない。お前は 40 日間すべての神の命令をなおざりにしてきた。しかし、神の寛大さはこの一つの小さな行為も無駄にしなかったのだ」

これらの言葉が引き金となって若者の心に火がともされました。それはとても高く燃え上がり、瞬時に古い盲目的な愛を消し去り、彼の中で神に対する新しい愛が勢いよく燃え始めました。彼は家に帰ると、人生を変えた奇跡を隠したまま、鍛冶屋として仕事を続けました。毎日、彼は 1 ディナールを稼ぎ、夜にはその収入を貧しい人に与えてしまいました。でも、彼の心は満たされ、申し分ないほど幸せでした。



© 2022 SYDA Foundation®. 著作権所有。

グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダ著『神は純粋な心を愛する』第 10 章「無私の奉仕」(SYDA Foundation 2005) 124～126 ページ